

高知のスポーツクラブ事始め

清原 泰治

(高知女子大学文化学部教授)

「佐川体育会、世上衛生の注意をゆるかせにするよりために、天寿を保ち得ざる者多かるはたんそべき次第なり。高岡郡佐川村の壮年者は此にみる所ありて、今回、体育会を設置し、唾鈴、棍棒、球竿等其他種目の運動器械を備え付け、会員は三十余名ありて度々体操をなし、会員外の者といえども時々演習を許すといふ。」

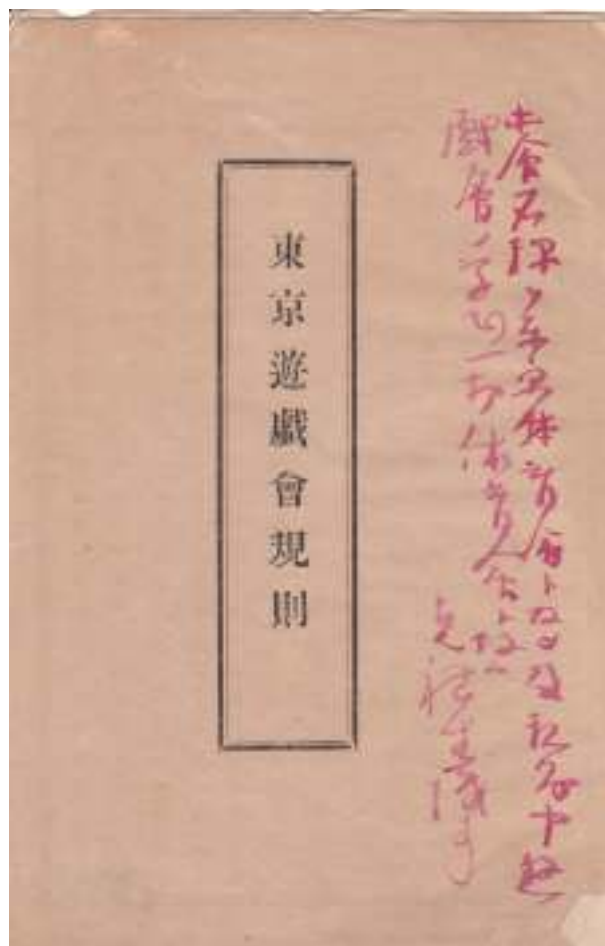
土陽新聞が1887(明治20)年1月29日に掲載した、佐川体育会の記事である。佐川体育会は、今日的に言えば地域スポーツクラブで、現在確認できる限り、高知県で最も早く設立されたクラブである。この記事を手がかりに、高知のスポーツクラブ事始めについて見てみたい。

* * * * *

「世間の人々が衛生上の注意をゆるがせにしているために、天寿を全うできない人が多いのはたいへん嘆かわしいことだ。高岡郡佐川村の壮年者たちはこのような状況を見て、体育会を結成し、唾鈴(アレイ)、棍棒(こんぼう)、球竿(きゅうかん)等其他種目の運動器械を備え付け、会員30数名でたびたび体操し、会員でない者も時々練習に参加することを許可している。」

現代語にすれば、こういう記事になるのだろうか。

佐川体育会の目的は、会員の体力づくりや健康づくりである。そのために、数種類の体操器具をそろえ、会員たちが日常的に活動していたようである。また、会員外の者の参加も認めていることから、閉鎖的でなく開放的な組織運営をしていたと思われる。つまり、健康と体力増進のために運動が必要であることを認識した有志が、その組織化に意欲的に取り組み、地域



の人々の運動への関心を刺激しながら活動していたのである。

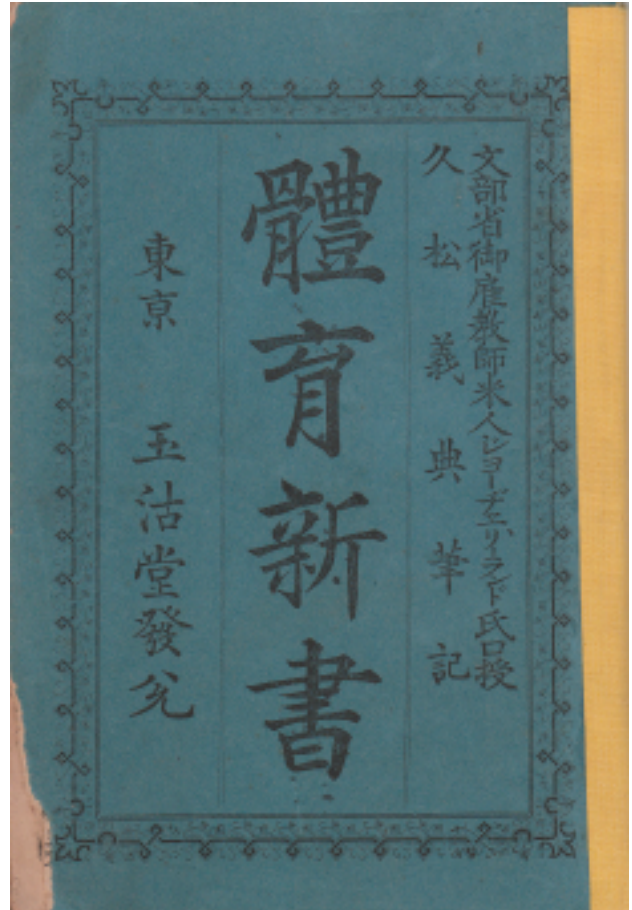
なぜ、このような体操クラブが当時の佐川村に結成されたのか。その謎を解く手がかりは、『体育新書』という一冊の本と、『東京遊戯会規則』というリーフレットの表紙に書かれた走り書きである。これらの史料は、元高知大学教授・隅川清氏が所蔵していた。隅川氏がどうやってこれらの書物を入手したのかはわからない。現在は、隅川夫人に寄贈していただき、私が保管している。

東京遊戯会規則の表紙には赤字で、「本会名称ヲ東京体育会ト改〇、〇規約中遊戯会ノ〇〇一切体育会ト改ム 克礼生識ス」と書かれている。(注:文中〇は判読不明)

この「克礼生」なる人物とは、1867(慶應3)年1月3日、佐川町に生まれ、後に大阪医科大学で内科学の研究と教育に従事した堀見克礼のことであると言われている。堀見は高知尋常中学校卒業後、高知を離れていたが、父・久庵の在世中は毎年帰郷していたという。

ここから先は推測である。医学者として運動と身体の関係について興味を持った堀見は、当時の最新の体操理論に基づいて書かれた著書、『体育新書』を手に入れた。『体育新書』は、アメリカから日本に体操法を伝えたG・A・リーランドが口述した内容を伝習所の生徒の久松義典が書き留めて出版したものである。体操伝習所で教授された体操法の紹介を中心に編集されている。ここで取り上げられている体操法は、主に唾鈴、棍棒を使う「軽体操」で、以前に流行した「ダンベル体操」によく似ている。体操伝習所は1878(明治11)年に日本で初めて国によって設立された体操教員養成施設である。したがって、『体育新書』に書かれている理論と体操法は、当時の最新の情報であったと言って良い。

東京遊戯会は、1883(明治16)年に体操伝習所の教職員によって設立されたものである。翌年、東京体育会に改称している。東京遊戯会は28条からなる「東京遊戯会規則」を作り、会費を集め、定期的に体操やスポーツを実施する団体であった。体操伝習所の卒業生たちは、この東京体育会(東京遊戯会)を手本に、明治20年頃に、それぞれが赴任した土地で体育会を結成し、欧米の体操とスポーツの普及に貢献しようとしていた。それは、茨城県の常総体育会、埼玉県の埼玉体育会、愛知県の浪越体育会などの規約を見ればわかる。



しかし、佐川体育会は、同じ時期に設立されたこれらの体育会とは設立の経緯が異なっている。当時の佐川村の学校には、体操伝習所卒業生がいたという記録がない。つまり、医学者の卵であった、あるいは既に医学者となっていた堀見が『体育新書』と「東京遊戯会規則」を佐川村の友人たちに教え、その内容を知り、運動の必要性を感じた彼らが佐川体育会を結成し、活動していたと想像される。

佐川町は「文教の町」と言われ、牧野富太郎(植物学)、西谷退三(博物学)、森下雨村(探偵小説)など、多くの有能な若者たちを輩出した土地である。おそらくは、経済的にも恵まれた地域だったと思われる。それゆえに、当時の最新の体操理論を取り入れ、自主的・自発的に東京遊戯会規則を手がかりに体操クラブを設立し、体操器具を購入(製作)して活動することができたのであろう。

* * * * *

しかし、佐川体育会についての史料は、この記事だけしかない。もう 20 年近く前になるが、冬の佐川町内を史料を求めてさまよったことがある。青山文庫、教育委員会などを回ってみたが、佐川体育会の足跡を明らかにすることはできなかった。

1908(明治 41)年 8 月 4 日の土陽新聞に、佐川同志会が行う予定の運動会の記事がある。この佐川同志会が、佐川体育会とどんな関係にあるのか、あるいは関係がないのか、それを知る手がかりはない。

地域の抱える課題をどう認識し、それを解決するためにどういう地域スポーツクラブを創り活動するのか。明治時代でも今でも共通する、地域スポーツクラブのスタンスではないだろうか。

<参考文献>

前田幹夫「高知県における体育会(明治二十年一月)の歴史的意義」『高知大学教育学部研究報告』第 25 号第 3 部、1973 年、pp. 13-27.